



<抄録>鼠径ヘルニア手術を契機に発見された卵巣原 発腹膜為粘液腫の1例(第194回岐阜外科集談会)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2008-07-15 キーワード: 作成者: 肥田, 典之, 山口, 晃弘, 磯谷, 正敏, 原田, 徹, 金岡, 祐次, 鈴木, 正彦, 芥川, 篤史, 菅原, 元, 鈴木, 潔, 臼井, 達也, 笹屋, 高大 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12099/12054

第194回 岐阜外科集談会

日 時：平成13年11月17日(土) 午後1時30分より

場 所：岐阜大学医学部 講堂 (外来棟4階)

1. 小児食道裂孔ヘルニア嵌頓の一例

国立療養所長良病院・小児外科

安藤公隆, 鴻村 寿, 安田邦彦, 水津 博,
二村敦朗

今回我々は、嵌頓を来した小児巨大食道裂孔ヘルニアの一例を経験したので若干の文献的考察を加えて報告する。症例は1歳6か月女児。家族歴として姉に食道裂孔ヘルニアがある。生後3か月時に哺乳後の嘔吐が出現し、UGI所見より食道裂孔ヘルニアと診断された。保存的療法で経過観察されていたが、1歳6か月時にも同様の症状が出現した。単純X線・UGI検査所見より、結腸の左胸腔への脱出を伴い胃のほとんど全部が右胸腔に脱出した滑脱型食道裂孔ヘルニアの術前診断で開腹術を施行した。開腹時、食道裂孔は二横指通過可能な程度に開大しており、胃のほとんど全部と横行結腸の大部分が嵌入していた。脱出腸管を用手的に還納し Boerema-Filler 法を行った。術後は嘔吐を認めず、体重増加も良好で、本症例のように胃が大きく脱出した巨大ヘルニアでは、保存的療法によらずできる限り早期に手術を行うのが最良と考えられた。

2. 側頸嚢胞癌化例の1例

県立岐阜病院・外科

酒井華澄, 森川あゆみ, 早川雅弘, 日比俊也,
河合雅彦, 山森積雄, 三沢恵一, 大橋広大

同・救命救急センター

古市信明

症例：46歳男性。主訴：右頸部腫瘍。平成13年8月初旬に右頸部腫瘍あることに気づき、側頸嚢胞を疑われ、8月27日に手術目的にて入院。右胸鎖乳突筋背側下端3分の1に頭側が固定された直径2cm大の可動性のある、表面平滑で柔らかい腫瘍を触知した。エコーで単胞性、内部均一な low echoic lesion を認めた。CT では舌骨の高さで胸鎖乳突筋背側に内頸静脈に接する内部均一な low density area を認めた。造影CTでは腫瘍の被膜のみ造影された。8月29日腫瘍摘出術を施行。腫瘍は胸鎖乳突筋背側に位置し、直径2cm大、周囲との境界比較的明瞭で壁が厚く、もろい被膜で覆われ、頭側に向かい索状物が続いていた。病理組織学的検査では、腫瘍は嚢胞構造をとるが内腔は扁平上皮癌の像を示し、周囲リンパ組織への浸潤を認めた。一部に淡明な胞体を有する細胞よりなる、異型性重層扁平上皮も認め、側頸嚢胞の癌化と診断した。

3. 鼠径ヘルニア手術を契機に発見された卵巣原発腹膜為粘液腫の1例

大垣市民病院・外科

肥田典之, 山口晃弘, 磯谷正敏, 原田 徹,
金岡祐次, 鈴木正彦, 芥川篤史, 菅原 元,
鈴木 潔, 臼井達也, 笹屋高大, 児玉章朗,
服部正興, 渡邊克隆, 岡田洋介

症例は79歳女性。主訴は腹部膨満。平成13年9月老人保健施設入所中腹部膨満出現し、鼠径ヘルニアも認めためたため当院紹介受診となった。平成13年10月4日鼠径ヘルニアに対しメッシュプラグ手術を施行した。ヘルニアは外鼠径ヘルニアでヘルニア嚢内に多量のゼリー状粘液を認め肉眼的に腹膜偽粘液腫と診断した。術後CTを施行したところ上腹部から骨盤内まで多量の腹水を認め骨盤内に内部均一で周囲腹水よりやや高吸収域を示す多房生の腫瘍性病変を認めた。大腸内視鏡検査施行したところでは虫垂開口部より虫垂内に粘液の貯留している所見が得られた。平成13年10月22日開腹手術施行。腹腔内に充満するゼリー状粘液が存在し、腹腔内を検索すると両側卵巣に粘液の付着を認める多房生の腫瘍を認めた。以上より卵巣原発の腹膜偽粘液腫と診断し両側付属器切除、虫垂切除術を施行した。組織学的に虫垂、卵巣両方より粘液の嚢胞腺腫の所見が得られた。

4. 肺原発 MALT lymphoma の1手術例

岐阜大・医・第一外科

水野吉雅, 岩田 尚, 丸井 努, 松野幸博,
梅田幸生, 島袋勝也, 高木寿人, 森 義雄,

広瀬 一

同・放射線科

桐生拓司

同・臨床検査医学

下川邦泰

我々は肺原発 MALT lymphoma の1手術例を経験したので報告する。

症例は57歳男性。健診の胸部X線にて異常陰影を指摘された。胸部 CT で結節影を確認され、精査の結果 Lymphoma を疑われ、手術目的にて当科入院となった。

画像診断では、肺癌が疑われたが、CT 下肺生検にて Lymphoid interstitial pneumonia と診断された。悪性リンパ腫への進展を考え、右上葉切除 (ND2a) を施行した。

病理組織学的に、Marginal zone B-cell lymphoma,